



# 「ディスカバー農山漁村の宝」 グランプリ受賞

株式会社  
魚の屋



農山漁村の有する資源活用により、地域の活性化、所得向上に取り組む優良事例を選定する「ディスカバー農山漁村（むら）の宝」（内閣府・農林水産省主催）の選定授与式が12月3日、総理官邸で開催されました。全国から931件の応募がある中、31地区の優良事例の一つに選定されていた（株）魚の屋（大田市静間町）は、さらに最優秀にあたるグランプリに選定されました。



## 魚の屋の中島勝徳社長に

お話を伺いました。

—日本一、おめでとうございます！

総理官邸での授与式はいかがでしたか？

総理から直接授与される際には、たくさんの方のフラッシュがたかれ、とても緊張しました。官房長官や農林水産大臣にもおめでとう。これからは頑張ってくださいと声をかけていただき、グランプリを受賞したんだという実感がわきました。

—どういった点が、

評価されたのでしょうか？

「天然ワカメの希少性をビジネス化した行動力」「地域資産をブランド化し、障がい者、高齢者の雇用につなげた」といった点が評価されたと聞いています。

漁師の所得増にもつながり、当社の売り上げも伸びています。

—ここに至るまでには

苦労もあったのでは？

沢山ありますよ！（笑）  
小さな頃は、「魚の屋の息子」と、からかわれたものです。一方で父親の背中を見ながら、経営や人づきあいを学んだように思います。

社長就任時には、中国に工場がありました。大きな損失もあり、経営はとても厳しい

時期でした。

天然ワカメの調達も、初めは、漁師さんも半信半疑。少人数でのスタートでした。

テレビ番組で、当社のわかめふりかけが、「ふりかけNo.1」に選ばれたところまでは良かったのですが、原料が値上がりして、大赤字でした。高い宣伝費になりました。

—それでも頑張って

こられた思いとは？

この地域で商売し生きていくというところに、誇りがありましたし、天然ワカメには可能性があると感じてきました。

今回の受賞も、当社が評価を受けたことよりも、「おおだでも、頑張れば日本一になれる」ということが証明できたことが、何よりうれしかったです。この地にはまだまだ宝が眠っています。その宝を探し、磨きつけていきます。

